

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

# 大学間連携イベント 「国際協力のための対話型ファシリテーション」実施報告書

2015年9月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター



## はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国における平和構築と復興・開発に関する調査・研究・実践と人材育成を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業を平成 22 年度から実施しております。本報告書は、この事業の一環として 2015 年 7 月 4 日に特定非営利活動法人「ムラのミライ」のご協力を得て実施した大学間連携イベント「国際協力のための対話型ファシリテーション」の実施記録と参加者の報告書を取りまとめたものです。

当日は、お茶の水女子大学を始め 8 大学から 26 名の学生が参加し、国際協力現場において住民の本当のニーズを引き出す対話型ファシリテーションの理論と実践について具体的な事例を通じて学ぶとともに、実際に手法を使った対話（事実質問）のトレーニングを行い、当事者主体の開発・参加型開発について考える良い機会となりました。

実践的なプログラムで参加者の主体的な学びを促してくださった講師の中田豊一様、および積極的にグループワークを進めてくださった参加者の皆様にお礼申し上げるとともに、このイベントが更なる学びや実践へとつながることを期待いたします。

2015 年 9 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター  
センター長 北林 春美



## 目次

	ページ
1. 活動の概要	1
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) プログラム概要	
(6) 参加者	
2. 参加者報告書	5
3. 講師報告書	45
4. 資料	49
(1) 参加者アンケート集計結果	
(2) 写真	
(3) 参考資料「ファシリテーションを考えるためのケースストーリー」	



## 1. 活動の概要





## 1. 活動の概要

### (1) 活動の目的：

本大学間連携イベントは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業の一環として実施するもので、開発途上国の人びとの生活の改善を目指す国際協力活動の場で、当事者と協力者が対等な関係をつくり、当事者による課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」について、具体的な事例やグループワークを通じて学ぶとともに、当事者主体の開発・参加型開発について考えることを目的とする。

### (2) 実施日時：2015年7月4日（土）13:00～16:00

### (3) 実施場所：お茶の水女子大学 本館 127号室

### (4) 講師：特定非営利活動法人ムラのミライ

代表理事 中田 豊一氏

### (5) プログラム概要：

講師の中田豊一氏（認定NPO法人ムラのミライ代表理事）は、1980年代末に国際協力NGO シャプラニールの駐在員としてバングラデシュで農村の識字教育や貧困層支援の活動に従事した当時の経験を紹介し、週の大半を村での活動に費やし村人と話し合いを重ねながらも「活動は本当に役立っているのだろうか」という漠然とした違和感を抱いていたことを紹介された。その後、ラオスのプロジェクト評価調査に参加した時、評価者や援助者が一般化された思い込みに基づく質問をしても、相手の思い込みを惹起する回答しか得られないことに気づき、個別具体的な事実や経験を尋ねる「事実質問」によって住民の「真のニーズ」を掘り起し、住民と共に問題解決策を生み出していく方法として「対話型コミュニケーション」の手法を理論化したことを事例を交えて解説された。

ワークショップの後半では、参加者が二人一組で意見や感想ではなく相手から「事実」を聞き出す対話を体験し、感想を語りあった。また、某途上国の農村で村人の希望を聞いて設置された井戸が数年のうちに維持されないまま放置されるにいたったケースを取り上げて、どこに問題があったのかをそれぞれが検討した。

### (6) 参加者：

お茶の水女子大学 学部生 9名 大学院生 2名  
創価大学 学部生 1名

津田塾大学 学部生 1名

奈良女子大学 学部生 3名

日本大学 学部生 1名

宮城学院女子大学 学部生 2名

横浜国立大学 大学院生 2名

麗澤大学 学部生 5名

(オブザーバー)

麗澤大学 教員 1名

お茶の水女子大学 (グローバル協力センター) 教職員 3名

## 2. 参加者報告書



秋本 麗汀

麗澤大学 外国語学部外国語学科 国際交流・国際協力専攻 3年

私はこの講義に参加して、国際協力をする上で大切なことは何か学び、とても貴重な体験をした。そもそも私がこの講義に参加した理由は、お世話になっている先生からの勧めだった。国際協力に興味はあるものの、国際協力のための対話型ファシリテーションと聞いてもピンとくるものが正直無かった。しかし中田さんの話を聞き、開発途上国への援助の現状や援助をする上で大切なことを知って、私が所属している団体の活動へのヒントを得られることができた。

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

発展途上国の人が援助してくれた人を喜ばせるために、自然と事実ではないことを言うてしまうことにとっても衝撃を受けた。援助する側がもしそれに気づいていなくて、ただの自己満足の援助になっていたらと考えると援助するとは何かと深く考えさせられた。

中田さんは事実質問を見つけるまで、習得するまでに合計で 30 年はかかったとおっしゃっていた。私はそれをたった 3 時間で教えていただいた。今の私の経験からしても、今後の自分の将来を見据えても、事実質問が国際協力をする上で重要なことだと気付くことは出来なかったと思う。そういう意味では、自分の視野が広がり今後国際協力をする上でもためになった。

### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークを通じて、事実質問を続けて言うことの難しさを感じた。話が広がるほど、だんだんと事実質問から離れていき感情、あるいは気持ちを聞く質問へと変わっていった。意識して事実質問をすることを心がけていきたいと感じたと同時に、習得することは簡単でないと感じた。事実質問を繰り返すことで、話が広がり楽しく会話ができた。初対面の人と話すとき、出身はどこですか、何専攻ですかといった一定の会話が多かったが、1 つの物から話が広がり相手のことを短時間でも知ることができた。事実質問は国際協力をする上でも重要であるとともに、日常でもその能力を十分に使えるので常日頃から意識しなくてもできるようになりたいと感じた。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力をする上で、相手の文化や生活を知り信頼関係を築くことは大前提だと思っていた。しかし、現実には自分たちが十分に相手の文化や人柄、生活を理解していると思っただけで本当の援助ができていないケースがあった。この話を聞いて、事実質問の役割の大きさを感じた。また、こういったケースをなくすためにも何をすべきか考えさせら

れた。

私はこの講義を通して、国際協力をする上での重要な技術を学び、さらには自分の視野をも広げることができた。この経験をこの日のみならず、日常的にも実行していき習得したいと感じた。また国際協力とは援助とは何か、改めて考えさせられて良い機会となった。

**飯野 友里子**

**奈良女子大学 文学部 1年**

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私がこの講義を通して一番印象に残ったのは、国際協力には「知識の獲得」ではなく「技術の享受と実践」が最も大切であるということです。私は途上国にまだ赴いたことがなく、これから現場に実際に行くために、その土地の歴史に関すること、国際協力のあり方など、知識の獲得ばかりに目を向けてしまいましたが、そればかりでは実際現場に行ったときにいったい自分は何をすればよいか分らず途方に暮れるだけになってしまうことに気付かされました。だからと言って技術ばかりに目を向けて知識の獲得はしなくてもよいわけではありませんが、やはり現場に行く前に途上国の人々と接するための技術を身につけておくことは、国際協力を円滑に進めるための有益な準備となるに違いないと思いました。

### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回は実際にグループワークを通じて国際協力における途上国の人々とのかかわり方について体験形式で学びましたが、これも私にとってはとても貴重な体験でした。国際協力において途上国の人々と対話をする際に必要なのは「事実質問」であり、「なぜ」、「どのように」といった質問は相手の「思い込み」を誘発するに過ぎないというお話を聞いて、とても納得するところがありました。私たちは普段からこのような「思い込み」を誘発する質問を気付かないうちにしてしまっています。例えば兄弟と話す際でも、「今日の部活の試合どうだった？」と聞くと「普通」や「まあまあ」と曖昧な返事しか返ってこないことがあります。このような対話の仕方では対話自体が続きません。よって普段から「事実質問」を心がけ、対話スキルを身につけていきたいと思いました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は国際協力において最も大切なことは「現地の人々の声に耳を傾けること」だと思います。我々が一方的に質問を繰り返したり、我々の私見によって現地に必要な措置を提案してしまえば、彼らの自立のためには何の寄与もすることができません。よって、対話

をしていく中で彼らからその地域に欠けているもの、必要なものを話し出すことができるような雰囲気我々が作り出さなくてはならないと感じました。そのために今回学んだ対話における技術を普段から活用して行きたいと思います。今回の講義を受けるにあたって、国際協力に関する知識が乏しい私にとって初めはとても不安な思いでいっぱいでしたが、中田代表の分かりやすい説明と有意義なグループワークを通してますます国際協力に関する興味や意欲がわきました。またこのような機会があればぜひ参加したいと思います。

石川 杏奈

横浜国立大学大学院 都市イノベーション学府都市地域社会専攻  
博士課程前期1年

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回、中田さんの講座を通して多くのことを学ぶことができました。今回のファシリテーション講座に参加した女子学生の多くは国際支援を専門分野として大学で学んでいる人が多かったと思います。私は、大学の4年間で建築を学んでいく内に都市計画(都市開発)に関心を持ち、東南アジア諸国の都市開発に貢献できるような職業に就きたいと考えています。都市開発はどちらかというと NGO より ODA 寄りでマクロな視点から諸国の問題に取り込む職業になると思いますが、実際に問題を体感している国民の声を聞くというミクロな視点から問題に向き合うといことも重要だと考えるため、今回の講座に参加させて頂きました。

やはり講義で最も印象的だったのには、村民が無意識のうちに NGO の方に対して嘘を語ってしまうという事実です。NGO は村の自律を目指して援助活動を行っていたはずなのに、現地の方には物資を与えてくれる団体と認知されていたという事実が衝撃的でした。支援している側とされている側のベクトルが当初は同じ方向を向いていたのかもしれませんが少しずつずれていってしまったのかもしれませんが、村民たちは与えられることに慣れてしまい、自分が最大限に恩恵を受けられるような選択肢を意識しないうちに選んでしまうという傾向があるという現状を中田さんが辛そうに話しているのを聞き、支援の複雑さを感じました。

#### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、ペアを組んで5W1Hを使って「事実」を聞く質問をお互いし合うという内容でしたが、実践してみて会話が途切れてしまったり、相手の考えを問うような質問をしてしまったり等、その難しさを痛感しました。私たちは日常行っている会話は、一方からの質問だけで成り立っておらず、また相手の感情を聞く質問の内容が多いです。

このため、日常会話と和田さんが編み出した支援現場でのコミュニケーション能力とでは全く別物に感じました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は現在、都市計画とまちづくりを専門に大学院で学んでおり、海外ばかりではなく日本の地方過疎化が問題として取り上げられることがあります。そこで、当日伺った村民が ODA に依存している状況と日本の地方が補助金を頼って活性化を図っている状況に共通点があるように感じました。現在日本では人口減少による地方の過疎化が深刻化しており、再び人を集めて活性化を図る地方の動向があります。しかし、多くの取り組みがあまり成果を出せていない理由として行政に補助金を出してもらっていることが 1つの見解として挙げられています。補助金というセイフティネットがあることで、民間が危機感を持って真剣に取り組まない、利益を出せないのも継続性に欠けている等の数々の新たな問題を生み出していると言われていています。支援すること自体は必要なことだと思いますがその効果が最大限に発揮できるときは、支援している側としてもらっている側、双方の意向が「自律させる、する」という同じ方向に向いているときだと改めて感じました。今後は、事実を聞くコミュニケーション方法を多くの方が駆使して、意思疎通を図ることに重点をおいて支援活動を行うことで、途上国の自律がもっと現実味を帯びてくることを期待したいです。

石山 杏子

宮城学院女子大学 学芸学部国際文化学科 2年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

この講義を通じて私が一番学ばせていただいたことは、人とのコミュニケーションがいかに難しく、かついかに大事か、ということです。普段していることなのだから答えは簡単だろうと思えますが、そうではありませんでした。

自分がいつも友達とかわしているコミュニケーションと国際協力のときに使用されるコミュニケーション方法には歴然とした違いがあって、そのような場で交わされるコミュニケーションは、普段私たちがしていることは通用しないことに驚きました。

配られたものに、日本人が一方向的に質問し現地の人がそれに答えるという資料がありましたが、今思うとそれはコミュニケーションではなく、単なる調査だったのではないかと思います。一般化された質問や、why、how 質問をしていたので、それでは中田さんの言う国際協力をする上でのコミュニケーションは成り立たないだろうと感じました。聞き方次第で、互いの関係を良くも悪くもするというのを改めて考えられた、良い機会になりました。



### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークをするときに、5W1H（why、how は除く）を意識して会話するというのが目標でしたが、それが意外ととても難しかったです。2人1組になって1人6分の持ち時間で質問してそれに答えるという形式でしたが、6分が結構長く感じ、会話を続けることが大変だと感じました。質問を沢山考えなければならず、また話を膨らませる力も必要なのに、これを母国語が違う土地でして且つ国際協力もしているというのは、そう簡単にできることではないし、大変素晴らしいことだと思いました。

討論では、やはり一人ひとり違った考えを持っていて、聞いているのが楽しかったという印象でした。一つの物事を様々な視点で見るとするのは大事だと思いました。さらに、あのような初対面の人ばかりの場で、自分の意見を堂々と言える人は国際的な場面でもきっと活躍できると思います。この講義に参加された方々はきっと国際的な何かに興味がある方々だと思うので、今回教わったことを忘れないで欲しいし、自分も知識として持っておきたいです。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

講義の中での、「国際協力がうまくいかない原因には、こちら側にも問題がある。」という言葉が印象に残りました。これを言われて、国際協力への考え方ががらりと変わった気がしました。今までは、何をすれば生活が良くなるか、どんなことから始めたらいいのか、などということが一番に考えていました。しかしそれがこちらの思い込みで、自分本位でしかないということに気づかずにいると、援助が間違った方向に進んでしまうのです。それでは本当の国際援助とは言えないでしょう。

本当の国際援助とは何か、その第一歩となるのは正確なコミュニケーションをすることだということだと思います。そのためにはまず、国際言語である英語を習得する努力をしなければならぬと思いました。私はまだ会話ができるほど英語が話せないなので、今後勉強に努めていきたいです。そして国際協力ができるような人材になりたいと思います。

今回は、このような貴重な講演を開いていただきありがとうございました。

岡田 実夏

麗澤大学 外国語学部外国語学科英語コミュニケーション専攻3年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

国際援助の失敗として、物やお金などいくら支援しても良い状況が続かないケースがあるのはなぜだろうと疑問に思っていた時があった。援助を受ける側が援助をする側に頼ってばかりで自立できていないケースはよくあるだろう。原因は何なのか、どうすれば自立

できるのか。今回の講義でそのことを知ることができた。原因は必ずしも援助を受ける側だけにあるのではなく、援助をする側にも問題があり、それは受ける側とする側の会話で変わってくるということに、私はなるほどとうなずいた。この講義の中でポイントとなった「事実質問だけをする」という方法はとても面白いと思った。援助をする前に、事実質問をすることで、その地域の人々が本当に問題意識を持っているか、何が必要か分かっているのかがすぐに分かり、援助をする側は何をすべきか考えることが出来る。これは画期的な方法だと思った。と同時に、今まで援助する側の質問に原因があったことなど考えもしなかったのでこの話は驚きであった。問題を聞きたいときは過去形を使う、思い込みの質問を2問以上したら次は必ず事実質問をするなど、相手の思い込みではなく事実を聞き出せるこの方法は、国際協力の場合だけでなく様々な場面で効果的であり、私も身につけたいと思った。

### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

2人1組になり、相手の持っているものを一つ選んで事実質問をどンドンしていく際に、実際にやってみて、事実質問だけをする難しさがよく分かった。相手のことを知ろうとして、どうしても「～だと思おう？」と質問したくなってしまい苦戦した。しかし、ある一つの物から事実質問を繰り返すことで、たくさんの情報を得て相手のバックグラウンドを知ることができ、やっていて面白いなと思った。また、ケースストーリーを読んで何が問題か3人で考えていた際に、この講義が始まる前に読んでいた時は気づかなかった問題点がいくつか見付き、改めて発言や言葉の選び方の重要性が分かった。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は今まで国際協力をする際は、その地域に住む人々のニーズにしっかりと応えることが最も大切であると思っていた。これは間違いではないだろう。しかし、今回の講義を通して人々のニーズに応えることが必ずしも良い状況になるとは限らないのではと考えた。ニーズに応じてばかりいると、援助に依存してしまい、自分たち自身で何とかしようという気持ちを持たなくなる可能性がある。それは成功と言えないだろう。重要なのは、その地域の人々の問題意識を高め、自立させること、それを手助けすることが国際協力であり、地域開発活動であると考えた。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今回参加した私たち麗澤大学のメンバーは今、ミクロネシアでゴミ問題改善のために活動をしている。今度の8月に現地へ行き、小学校やコミュニティで実際に環境教育をする予定で、現地の大学生と協力協定も結んでいる。どんなことやっいていこうか具体的な内容などは私たちが考えているが、今回学んだことを参考にして、現地の大学生にも率先して

環境教育をやってもらえるように、また住民にも問題意識を高めてもらえるように工夫してやっていきたいと思う。

奥田 紘子

奈良女子大学 文学部 3年

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私はこの講義を通して国際協力が上手くいかなかった要因、その解決法を学びました。国際協力を勉強する機会を得てから、そのマイナス面を聞くことが多くありました。しかし、その根本的な原因は誰も教えてくれないので、自分の中でとてももやもやしていました。JICA から派遣されて活動していた人の話も聞きましたが、いつも自分が役にたっているのかわからない、という悩みを抱えていました。そして、中田さんの話を聞き、コミュニケーションのやり方がまずかったのだと知りました。事実のみを答えさせるというのは一見すると簡単そうですが、言葉、文化が違う中、行うことは難しいことだと思います。しかし、事業や援助を続ける上で必要不可欠なのだと理解しました。

#### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

実際に事実を聞き出す質問だけをするという経験を通じて、その難しさを痛感しました。そして、知らない間に自分自身もひとの表情をよみながら、会話をしたり、答えを出してりしていることを改めて認識しました。援助される側も勿論人間なので、自分の村にとって有利になるようにしようとする应考虑でしょう。それをどうやって防ぐか、ということは非常に重要な課題ですし、中田さんのファシリテーションが今後もどれほど効果を生むのか楽しみです。

#### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

大学に入り、国際協力のマイナス面について学びました。大学入学以前からそういった分野に携わりたいと考えていたので、衝撃を受けていました。しかし、中田さんの話でその主な原因の一つがわかり、やり方次第では援助をする側、される側の両者にとって有益なことができるのではないかと期待を持ちました。

例えば、実際に現地にいる被援助者たちが各家庭にどれだけの水がいるのか、どのくらいの予算が必要なのか、調べることで現実が見えますし運営する時にも不可欠な知識を得ることができると思います。そうするだけで、持続性という点で国際協力は課題を一つ解決できると思います。まだまだ解決できる点がたくさんありますし、今後さらに効果のあることを展開すると期待できると思いました。

## 今後の学習や研究に向けた抱負

一度は遠のいていた、国際協力に携わるといふ将来の選択肢に再び魅力を感じました。この夏よりイギリスで交換留学生として国際協力を学びます。中田さんが教えてくださった技術を思い出しながら、知識を身につけてこようと思います。まだ将来については未定ですが、将来の選択肢に加えられくらい、きちんと知識をつけ、実際にどんなことをするのかを知り、考えようと思います。また、積極的に国際時事に目を通し今何が必要とされているのかという視点を持つようと思います。

川合 里沙

横浜国立大学大学院 都市イノベーション学府都市地域社会専攻  
博士課程前期1年

## 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

中田さんのファシリテーション講座を受講したのは2回目だったが、初回に学び実践する中で自己流になってしまっていたファシリテーション方法をもう一度見直す機会になった。前回から今回の講座を受ける間に経験した国内外でのフィールド調査と教育実習から今回の新たな学びを述べたい。

まず、フィールドワークでは事実を質問するように心がけていたが「今度は何を援助してくれるのか」「プロジェクトは役立っている」と想定外の答えや地域の現状とは異なった意見が返ってくるがあった。経験不足からこのような答えに遭遇した時、茫然としてしまい質問を続けることが今までの私にはできなかった。講座を受講し今度は感情的になるのではなく、失敗の背景を事実質問でさらに掘り下げること、「信じて待つ」ことが重要であることを学んだ。

ファシリテーション講座を初めて受講してから「これは何?」「いつ〇〇したの?」という質問を一番使ったのが実は途上国の農村ではなく、中学校での教育実習や学部時代にアルバイトとして個別塾講師をしていた時だった。例えばアルバイト先で初めて会う生徒と信頼関係を築く時、持ち物や勉強に対する態度から事実質問を試みるようになった。塾に通っているが勉強に対する意欲がわからず成績も下降気味だった生徒とは、事実を丁寧に聞くことで勉強は嫌いではないが手を付けられない理由が明らかになった。その生徒は毎朝5時に起きて部活動に励んでいた。部活動はスポーツが好きで始めたが先輩や先生との関係が苦しいこと、放課後や土日も部活動があり時間がなかつたり疲れていたりして学校の宿題と塾の課題が終わらせられなかったのだ。そこで、学校の課題を優先に塾の宿題は、テストにもつながるよう単語や授業での苦手部分に絞るようにした。他の先生は疲れて授業に集中しないことを注意するだけだったから、部活動の話聞いてもらえて嬉しいと言

ってくれた時はこちらもとても嬉しかった。中田さん自身もお子さんとの会話が技術を向上させる上でとてもよい練習だったと仰っていたように、事実質問から相手の本音を引き出すことは身近なところで実践できると改めて実感した。

### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

事実質問だけを意識して5分間話をつなげることの難しさを痛感した。その一方で、今まで知らなかった友達の生い立ちを聞くことができ仲を深めるきっかけとなった。一度きっかけを見つけるとどんどん別の方向に話を膨らませることができ、如何に最初に注目した持ち物や服飾品から話を引き出せるか経験や勘が必要だと感じた。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動について、支援する側が良いことをしていると思い込んでいるためプロジェクトの失敗につながる場合があることを学び、国際協力は良いものなのかということをお問自答させられた。支援する側がそのような思い込みに陥るのは、自分たちは地域のために役立つこと、自分の持つ経験や知識を使って何かするという意識が先行してしまうからではないかと思う。結果的に質問が誘導的になったり、住民が思うように動いてくれないという上から目線の考え方になってしまったりするのではないだろうか。もちろん成功したり、地域の課題が解決する場合もあったりする。ただし、一時的な成功で留まっていないか、住民がその後も自主的に活動や制度を続けているのか長期的な視点や評価が必要だと改めて実感した。私の専門は文化（開発）人類学であり、数ではなく語りで評価を行う。住民から本音を引き出し、気づきを生み出すためにも今回のファシリテーション技術は、もっと応用できるよう練習を積んでいきたいと思う。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

夏から途上国での社会調査をする機会が何度かある。そこで今回のファシリテーション講座で学んだことを実践していきたい。調査前にこのような講座に参加でき、本当によかった。ご自身の経験を他の人にも共有される中田さん、講座を開催されたお茶の水女子大学の方々に感謝したい。ありがとうございました。

澤木 優子

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義を通して最も印象に残ったのは、現地の人たちが私たち支援側の意図や感情

を読み取り、こちら側が喜ぶような反応や受け答えをしているというお話でした。これまでに私は何度も「途上国や貧困地域への先進国の援助は本当に役立っているのか」「物資やお金を送るとするのはそれだけで本当にニーズを満たすのか」「援助という行為は自分たちの行いが誰かの役に立っているという先進国の思い込みや自己満足なのではないか」という疑問を抱いてきました。私は途上国支援のボランティアへの活動経験がないのでテレビなどからしか情報を得られず、まるで日本からの援助がすべて効率よく機能しているかのように放送するメディアには自分が騙されているかのような感情すらわいてきます。ですから支援側が行っている活動が本当に役に立っているのかを把握するのはもちろんのこと、今回のお話のようにそれらがどのようにして役立っているか、その役立ち方は自分たちが予想し望んだ押し付けではないのかということについてもしっかりと知っていなくてはならないと強く感じました。あらゆる支援や援助には草の根レベルでの活動が重要だと言われますが、自分の行動だけに夢中になって草の根レベルで「知る」ということの大切さを見逃してはならないと思います。

### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回のお話の最も技術的なところであった、現状を知るための対話術は非常に斬新なもので本当に目からウロコでした。この対話術は相手を途上国の人々に限ったものではなく、自分たちにも大いに当てはまるものだったので納得しながら聞き、実践することができました。しかし実際にペアを組んでやってみると、想像していたより何倍も難しくて衝撃を受けました。自分が事実を聞く質問をしていると思っていてもよく考えるとそうではなかったり、事実だけを聞こうとすると考え込んでしまっただけで質問が浮かばずに対話のテンポが崩れたり、うまくいかないことだらけで難しかったです。また 5W1H のうち Why は言い訳につながってしまうから質問してはならないと聞いたとき、「言い訳だと気づかない言い訳がある」というお話にはなるほどと思いました。例えばなぜ遅刻したの？と聞いたとして、忘れ物をしたからという返答が返ってくれば言い訳だとすぐ思えますが、どうして貧しいの？と聞いて読み書きができないから、お金がないから、という返答は誰も言い訳だとは思わない、とおっしゃっていて、確かにそうだと腑に落ちました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

一般に国際協力や地域開発活動というと、JICA や NGO などが物資や金銭面での援助を行う、というイメージがあると思いますし、実際にそういった援助もあると思います。私の中では特に JICA の援助は規模が大きいがために現地の人たちとの会話をおろそかにしていそうな先入観がありました。そのため今回のお話のように現地の人々との対話をとても大事にする国際協力があるのだと少し驚きました。しかしそれ以上に、私は現地の人々と対話をする際は現地の人たちは自分たちが欲しているものなどを素直に話してくれるも

のだと思っていました。そんなことは決してなくて、最初に書いたようなことも普通に起こってしまうのだと分かりました。自分が考えていた国際協力は、知らず知らずのうちに「援助する側が支援を受ける側へ協力してあげる」、「支援を受ける側は援助する側に喜んで協力する」図式に収まってしまっていたのだと知ることができたのが、今回得られた一番の気づきだと思います。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

私は学科で国際協力について概論などを学んでいますが、このファシリテーションで学んだ実践的な内容も心に留めて今後も勉強していきたいと思います。

志田 沙央理

お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 3年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

もともと、国際協力という分野は興味がありましたが、途上国にはまだいったことがなく、新聞やテレビを含めたマスメディア、さらに本などでしか現状を知る手段がなかったので、講師の方に途上国の現状や、先進国、そして多数の支援団体の支援についてのお話を聞くことができ、本当に充実した時間を過ごすことができました。本当に、今の支援の仕方でいいのか、しっかりとそこに住んでいる住民について考えた上で支援者側も行動していかなければならないということを強く感じました。現在行われている海外でのスタディツアーも実際に意味があるのか、支援者が住民について理解していないにもかかわらずこのようなことを行っているのかということは講義中も、講義後の現在も考えています。

### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

講義中には、グループワークをする機会がありましたが、実際に対話を行う上で大切にすべきことを実践できたことはとてもよかったです。対話というのは一見簡単に見えて、とても難しいということも改めて認識できました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動は非常に大切だと思いましたが、そこに住んでいる住民の立場に立っていかん支援や協力ができるかということがなによりも必要なのではないかと感じました。私たちの考えだけで、その地域への支援や協力について検討せず、足を運び、実際にこの講義で学んだ手法を用いて行動していくことが大切であると考えました。

## 今後の学習や研究に向けた抱負

まず、このような貴重なファシリテーションに参加させていただきありがとうございました。私は卒業論文において、この講義で学んだ手法を取り入れ、研究を進めていきたいと考えました。本当に今回のファシリテーションに参加できてよかったです。

筋 晶子

麗澤大学 外国語学部外国語学科英語英米文化専攻 4年

## 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回まさに、国際協力の第一線の現場で活躍してきた中田豊一さんの対話型ファシリテーションの講義を聴き、今まであまり考えずにしてきた対話を見直さなければならないと衝撃を受けました。一問一答形式で続けていく対話の中で、こんなにも事実確認ができ、本音が出てくるなんて思ってもいませんでした。私のしてきた質問は思い込みを引き出してしまふ一般化された質問「なぜ」「どのくらい～」が多く、自分がこうであつたらいいなと思う答えを自分から引き出していたことも多いのかもしれないと感じました。私は大学で、ミクロネシアという国で環境教育を行うプロジェクトを行っています。今年から本格的に劇や紙芝居などを通し、楽しんで見て、参加してもらう中でポイ捨てがよくないこと、分別が大切なことなどを伝えようと思っています。本当に私たちが伝えたいことが伝わったのか、また現地の現状が環境教育を通してどう変わっていつているのか、その確認に今回のこの講義はすぐに使える技術であり、現地に行くまでに特訓し、少しでも本音を引き出したいと思います。簡単な質問を繰り返して、言い訳や願望でなく事実のみを多く引き出すことで、今まで見えてこなかった問題を直接そこに住む人達から引き出せることが分かり、過去形にして質問する、Yes か No で答えられる質問をするといったこの対話技術を習得することでミクロネシアでの活動だけでなく、日々の人との対話がさらに楽しく、勉強になるものになるとこの講義を通し感じています。

## グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

二人一組で行った対話型ファシリテーションの実践は、何気なく相手が持っていたものから事実を確認する質問を繰り返す練習でしたが、最初は想像以上に how、why を使わないことが難しく、変な質問ばかりしてしまいました。同時にいつもどれだけお互いの思い込みを話していたのだろうと怖くなりました。ただぎこちないにしろ事実を聞く質問を繰り返す中、相手が去年の夏休みしていたこと、普段の生活など、相手が持っていたものから短い時間で多くの事実をつかめました。同時に私は何も変えていないはずなのに、なぜか会話が弾む人は、その人がこの事実質問をすることが多いから途切れることなく話して



いるのだと実感しました。中田さんも仰っていたように、この技術の勝手は分かったところで実践できなければ意味がないと思うので、家族や友達などと話すときに意識して事実質問を多くし、もっと中身の濃い対話ができるようになりたいと強く思いました。

二つ目にやったケースストーリーの問題点の話し合いでは、講義前に読んだときとは明らかに違う印象を持つことができました。講義前には、このケースストーリーは国際協力の場ではよく行われている住民との対話だと思ったし、全体的に「私」が誘導しているなと感じただけで、どこが問題だったのか分かりませんでした。でも講義の最後に改めて読んでみると、最初の「一番大きな問題は何ですか」から何かをあげるために来たのだと住民側に教えていることになるし、「なぜ」「どうして」を使った質問ばかりで相手から願望を引き出しているだけの対話になっていると、問題点を多く見つけました。また全部の活動を援助する側がやっちゃっているから、また壊れたときは助けてくれるだろう、そもそも村人を交えてやっていないから、村人がやり方を分かっていないといった問題も見つけ、主体性を持ってその人自身がやらなければ援助の意味がないことが印象に残りました。国際協力の場でなくてももっと身近な、私のアルバイト先である小学生の家庭教師で教えているときなど、分からないことを考えさせる時間も取らず教えるだけになっていたことがあると感じ、反省しました。相手のためにやっていることが本当に相手の役にたっているのかと今まで感じたことはあまりなかったですが、今回の短いケースストーリーに関して話し合う中で、自分自身思い当たる節は多くありました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

相手のためにやっているけれど、本当に相手の役に立っているのかと感じてずっともやもやしてきたと中田さんはおっしゃっていました。この感覚に気づかず国際協力の場に飛び込んでいる人、また気づいていてもどこが悪いのか分からない人は多くいるのではないかと思います。私は今回この講義を、ミクロネシアでのプロジェクトが本格化する前に聞いたことで、自分が本当に相手の役に立つためには、シンプルな質問を通して現状や問題を相手から引き出すことが一番重要であると実感できました。また絶対に「やってあげている」という姿勢で国際協力、地域開発活動をやってはいけないと改めて感じました。住民が問題に気付かずに問題と感じなければ、いくら援助する側が問題と思って取り組んだところで主体性はなく、援助する人がいなくなれば終わってしまう一過性のものになってしまう。今この話を聞いたことで、相手が本当に求めているものを引き出して、その問題を一緒の目線で解決していく重要性を認識しました。私も少しでも問題が解決に向かうように、そんな姿勢でミクロネシアの人々と関わっていこうと思います。

鈴木 奈々保

宮城学院女子大学 学芸学部国際文化学科 1年

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

自分が相手に質問した内容の本質を、相手にきちんと理解してもらわなければ、円滑なコミュニケーションをとることは難しいということを知りました。一般化された質問は、相手の思い込みの答えを言わせてしまうので、事実を問う質問をするように心がけたいです。また、相手とコミュニケーションをとる際には、相手の答えをよく聞き、その中から使える事実を使って質問をしようと思います。

#### グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

近くの人と5分間コミュニケーションをとるという活動では、同大学の先輩であったにも関わらず、会話を続けることが困難でした。なぜ、という質問をすることは、言い訳などを聞いてしまうためタブーと知りつつも、自然と使ってしまうと改めて感じました。

知人でも会話が続かなければ、海外の方と会話を続けることは、より困難だと考えます。自分の無力さに気付くことができたグループワークでした。

#### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力をしようという善意があっても、状況をきちんと把握していなければ、相手に迷惑をかけてしまう可能性もあることを理解できました。固定観念を捨てて、現状把握をすることを心掛けたいです。また、表面的な言葉だけでコミュニケーションをとるのではなく、表情も意識して、活動しようと考えます。

#### 今後の学習や研究に向けた抱負

海外の方とコミュニケーションをとる際には、言語ができるだけではよくないということに気づくことができました。そのため、今回得た技術を発揮できるよう、生活に少しずつ取り入れ、訓練を重ねようと考えます。

高田 実穂

お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 1年

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

まず私が衝撃を受けたのは、支援の効果に対して、住民が無意識のうちに支援者側の意

向に沿った思い込み発言をすることがある、ということだった。住民の反応を鵜呑みにし安心していても、その後になって初めて問題が明るみになってくるケースがあることを知り、本当の住民の意向を汲み取る難しさを感じた。お互いが対話をする中で、相互に無意識に思い込みを強める方向へ話を進めてしまっているのではないだろうか。私は今まで様々な支援グループの活動報告などを見たことがあるが、地域に大いに役立っているとアピールする団体は非常に多い。しかし今回のケースを知って、与えられた情報を鵜呑みにせず、一度立ち止まって疑ってみることも重要だと思った。依存する住民ばかりが悪いのではなく、思い込みを誘発し、住民の自立の機会を奪っている支援側にも大きな責任があることを知った。同時に、支援者はそのような大きな責任を担っている存在であることを認識し、真摯に向き合う姿勢が重要だと思った。

また、ものの聞き方によってたどり着く結論が全く異なることを知り、尋ねる技術の重要性というものを強く感じた。今回学んだ対話術は、一般化された質問ではなく、事実質問を繰り返し少しずつ物事の本質を引き出していくというものである。私たちは日々の雑談においても、「～だと思ふ」を暗に含んだ質問が非常に多いが、国際協力現場で実際に用いてしまうと、思い込みの範囲でしか話が進まず、根本的な解決につながらない。過去の行為に関する事実質問を繰り返し、それらをつなげることで、思い込みから抜け出す気づきを相手に与えるというスキルは、そもそも普段の質問に2種類の尋ね方があることを認識していなかった私にとって、本当に新鮮なものだった。この対話術は日々の生活においても有効に活かせる場が多く、コミュニケーション能力の向上としても大いに役立つだろう。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークを行い、実際に事実質問を繰り返すことの難しさを実感するとともに、日常会話の中で普段自分がどれだけ思い込み質問を多用しているかに気づかされた。また、具体的なケースストーリーに関して、対話術を知る前と後では全く見る目が変わったことが非常に印象的だった。対話術を学んだ後にケースストーリーを読むと、支援側が会話の主導権を握り、村人が受け身でただ従っている印象を受け、住民との話の進め方の問題点が次々と見えてきた。この議論から、ひとつひとつの尋ね方の重要性（特に最初の切り出し方）や、支援者中心ではなくあくまで村人自身からの提案を促すことが大切であることを学ぶことができた。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回の講義を通して、住民自らに課題の発見とその解決に向けた行動を促すことこそ支援側の大きな役割であると強く感じた。促すというと少し上から目線な気もするが、やはり住民が自ら課題を発見し、その原因を突き止め、対策管理をすることは、住民の真の自

立には必要不可欠である。本当の国際協力とは、課題発見・原因研究・対策管理のすべての面において、「～してあげる・与えてあげる」という姿勢ではなく、「手伝う・支える・協働する」という姿勢が必要である。正しい支援をするためにも、今回の対話型ファシリテーションスキルは今後国際協力に携わる多くの人々が身につけておきたいものだった。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

まず今夏に予定されている国際共生社会論実習におけるベトナムスタディツアーで、このスキルを活かしたい。そのためにも、日頃の生活の中で、少しずつ意識して練習していきたいと思う。国際協力に長年携わる方から生の体験談をきくことができ、とても有意義な時間だった。国際協力は状況や場所・環境によって柔軟な対応が必要でなかなか難しい点も多いが、同時に多くの人のためにもなる面白さもあるので、今後も学びを進め理解を深めていきたい。

高橋 絢美

お茶の水女子大学 生活科学部 1年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

ボランティア活動で相手とコミュニケーションをとるために大切なことが、「事実を訊く質問」であるという話がとても興味深かったです。今まで、海外ボランティアで大変なことは言語の壁を越えることと、相手の考えや気持ちを知ることだと考えていました。交流を通じて相互理解ができれば、その地域の問題と解決策を相互に共有することが可能になると思っていました。そのため、コミュニケーションをとるために大切な方法は、相手の感情や価値観になるべく触れることであるとも思っていました。しかし、地域の人々と親密な関係を築いたとしても、ボランティアの人々は外部から来た「与える側」の存在であり、与える言動をしているだけでは本当の問題解決には近づけないと知りました。地域の人々がボランティア団体に依存し、自分たちで継続的な努力をしない原因の一つに、そのように「対話」が深く関わってくことに驚きを感じました。ボランティアをするにあたって、「対話」は私たちの力で改善できることである一方、改善するにはとても難しい課題だと知りました。

事実を訊くための方法として具体的に、When, Where, Whoのような疑問詞を使うことが相手の感情や思い込みとは離れた答えを得られる方法だと知りました。その際、Yes/Noで答えられる質問をすることで、相手に状況を思い出させる余裕を与え、焦って誤った答えを出す、嘘をつかれることを避けられる質問も効果があると学びました。逆に、How,

Whyのような質問は相手の言い訳や思い込みを誘発し、不正確な状況把握に繋がってしまうことを先生の体験を通じて知り、驚きを感じました。このずれが、ボランティア活動において、相手が本当に必要な物、相手の生活に適したものを提供できなくなってしまう原因に直結していると思うと、対話の方法を身につける重要性を痛感しました。ボランティアの場だけではなく、物事が上手く行かない時、相手と食い違いを感じる時、それは自分自身のコミュニケーションのとり方や相手への固定観念が大きく影響していると学びました。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

私は相手の身近な物から事実だけを訊く質問の練習がとても難しいと実感しました。普段友人ととるようなコミュニケーションができないと、同じ言語の相手との会話でさえとても苦勞すると分かりました。何より、私の持っていた固定観念を自分で理解することになりました。私は、お茶の水女子大学で行われている講義なので参加者はほぼお茶の水女子大学の学生だと思い込んでいました。そのため、相手の物から相手の生活まで話を広げていくにあたり、相手と場面設定での食い違いが生じていました。その時感じた不思議な感覚が、中田さんがボランティア活動を行っていた時に感じた「眼鏡が曇っている感覚」に繋がるのかもしれないと思いました。実践してみることで、対話の難しさ、意識していなかった自分の現状に関する捉え方を感じられた体験になりました。調べすぎて先入観を持つべきではありませんが、まずは、自分のいる場がどのような場なのか、どのような人がいるのかという客観的事実の把握が必要だと感じました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力をするにあたって大切なことは、ボランティアとして自己満足な「与える行為」で終わらせないことだと考えました。相手のためになっているかどうかは本当に分からないことですが、与えるだけで終わりにしてしまったり、相手から望んだ返答が来たから安心したりしては、本当の問題解決には繋がらないと教わりました。相手がこちらに合わせた反応を示しているだけで、実施されている活動の本当の目的を理解していない、実は彼らが要求していない支援であることが少なからずあることに驚きました。だからこそ、中田先生が今回教えてくださった「対話」を活用したコミュニケーションが必要だと感じました。相手が事実をそのまま答えやすい内容をきっかけとして、彼らの生活状況や文化を把握することで、自分たちのその地域に対する固定観念を取り除いて現実を見る目が要求されていると感じています。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

私は今までほんの一、二週間の海外ボランティアで自分が行えることは限られていて、

更にその行為が相手の役に立てられる可能性はもっと低いと感じ、海外ボランティアにはあまり積極的に参加してきませんでした。今回の授業を通して、ボランティアはその地域にいる期間ではなく、どれだけ相手の現状を把握できた行動が出来るかが重要だということを知りました。もちろん、その活動も学生の私がほんの数週間で出来ることだとは思っていませんが、相手との対話を現地で実際に体験することが大きな一歩になると感じました。私が数週間で出来ることはどれくらいあるのかを知るには、どこの地域で何人の人に向けてどのような方法で援助が行われているか、それが現地の人々が本当に求めていることなのか、実際に見聞きして学ぶべきだと感じています。授業での知識は基本でありとても重要ですが、社会の中で現状を捉えて自分の行動を考えるには様々なことを体験することが重要だと思いました。そのため、今後の学習では、授業では社会問題に対する基本的な知識や語学力を身につけ、学校で主催されているボランティアに参加していきたいと考えています。最終的には、大学在学中に自ら調べた外部のボランティアへ参加したいと思っています。全く知らない人々と環境は、自分の中にある固定観念を減らしてくれると考えているためです。地域ごとにミクロな対応をする力と、資金や人々を踏まえたマクロな活動の動き、その両方を体感することで、将来ボランティアの道に進まなくとも、社会の中で自分の力を発揮して「誰かの役に立つ」ようになりたいと考えています。

出口 貴美子

日本大学 文理学部英文学専攻 4年

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

貴重なご講義を拝聴させていただき本当にありがとうございました。また、このような機会を設けて下さった主催者の方々に心より感謝申し上げます。講義では今まで知らなかったことが多くあり、まさに目から鱗という言葉がぴったりのように感じました。印象に残ったこととしては、配布された資料の内容でしょうか。読んだだけでは、まったく問題なく行われているように感じましたが講師の方のお話を聞いた後、問題意識を持って読み直すといかに押し付けの援助が多かったのかと感じました。実際、開発援助などにおける支援の場では、効率よく的確に限られた時間やお金などの中行わなければならないことも確かですが、その前の人と人とのコミュニケーションスキルがとても大事になってくることを改めて感じました。

#### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

ケーススタディを検討し、グループワークを行うことで実際に体験できて有意義なものとなりました。心理学にも通じるものがありますが、簡単な質問、すなわち会話のキャッ

チボールをすることで、アクティブリスニングを行い相手との距離を縮めることが大切だと改めて感じました。傾聴の姿勢が大事だと改めて感じました。どうしても、支援者と援助を受ける側だと上下関係が出来てしまうので、なかなか限られた時間の中で思いを引き出すのは難しいとは思いますが援助者の人間力、コミュニケーションスキルによって効果も変わってくるのではないのでしょうか？また、例え同じ結果に行き着くのも、支援者が初めから用意した答えに導くのと、支援を受ける人たちが考え検討して行き着いた答えだとその後の効果は大きく変わると思いました。そこに参加の原理が働くことで、支援を受ける人々のその後の取り組みは大きく変わってくるのだと思いました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動など課題は山積みだと思いました。援助関係の仕事をする人の専門性はもちろん、先に述べたコミュニケーション力や、色眼鏡でものを決め付けるのではなく、幅広い視野を持つことが大事だと感じました。また、援助を受ける人々も多様化しています。その多様化している人々に柔軟に対応できるような柔軟性も必要だと思いました。また、国際協力という言葉は、よく耳にしますが実際は一般の人は私も含めよくわかっていないのが実情だと思います。一般の人々に、浸透していくような教育の場や、啓蒙活動が必要だと思えます。

辛口になってしまうかもしれませんが、今行われている国際協力というものがざっくりしすぎているので（例えば NGO による緊急人道支援も、青年海外協力隊も同じように一般人は国際協力と捉えます）、きちんとした明白な区分と、必要なものと不必要なものをふるいにかけていく必要があると思えます。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今後は修士課程にすすみ、国際栄養を学んで行きたいと思えます。海外での、食とジェンダーそして、とりわけ子供にフォーカスして研究して行きたいと思えます。

貴重なご講義本当にありがとうございました。

**豊島 三千栄**

**お茶の水女子大学大学院 ライフサイエンス専攻博士前期課程 1年**

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回、非常に印象に残ったのは「5W1H」です。今回の講義名から想像していた講義内容や日常的に行われている国際協力関係の講義内容のように「何をどのように解決すべきか」に重点を置いたものではなく、「現地の人から本物のニーズを聴き取るために必要な会

話の仕方」を切り口に進んだ講義はとても新鮮でした。そして、作文のスキルとして頻繁に登場してきた 5W1H が、相手の本当に望んでいることを聞き出すためのツールになるとは今まで思いもしませんでした。確かに今までの経験を振り返ってみると、どこか掴みどころがなく居心地の悪い会話をしていると感じた時、お互いに Why の部分にばかり気が行き過ぎて、本題・核心が宙に浮いてしまっていたのだと感じました。私はこの講義を通して、何かをしてあげたいという「与えたい・前のめりの気持ち」で国際協力に関わるよりも、その場の環境に疑問を持ち、現地の方々と共に解決に挑む「探求・二人三脚」の姿勢で国際協力に関わる方がお互いに良い結果を生めるのだと学びました。そうすることで、5W1H を用いながら相手が本当に望む支援方法を根気強く探せまし、継続的な支援を行うことが出来ると考えたからです。国際協力と聞くと非常に壮大な印象を持ちますがその 1 つ 1 つはコツコツとした人間関係と地道な作業の積み重ねであることを改めて理解しました。

#### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

Why の質問無しで人と会話を繰り返すのは意外に難しいことでした。相手の持ち物から会話を展開するという作業では、気づくと何度も Why の質問を投げかけそうになってしまいました。しかし、そのグループワークで私の相手をして下さった方の持ち物のスカーフから、最終的に時間がとても足りないほど会話が広がり、非常に驚きました。直接「なぜ」と聞かないことで、相手の考え方や価値観を短い時間のなかでも聞くことが出来たと実感しました。今回の会話を例にとると、「なぜそのスカーフを買ったのですか？」ではなく「このスカーフのどのようなところが気に入ったのですか？」と質問することでその方の好みをピンポイントでお伺いできたということです。Why の質問は相手の思い込みを誘発するというお話でしたが、やはり、会話の流れの中で「なぜ」と聞かれると「何か答えなくては」という心理が働き自分の考えとは別の何かしらの言葉を発してしまうことがあると思います。Why と尋ねない会話の方法は、もしかしら今の生活でも必要なスキルかもしれません。会話の例から問題点を見つけるワークでは、「井戸があると便利だと思いませんか？」といった支援する側の「誘導質問」が問題として取り上げられました。そしてこの質問は、先述の「与えたい・前のめりの気持ち」だと思いました。支援者側が前のめりだと肝心な現地の方の主体性が欠けてしまい、後々逆に現地の人を苦しめてしまいます。

一步引いて現地の人々の行動を見守る気長さや、支援の線引きを規則に従い時に毅然とした姿勢で伝える冷静さのようなものが非常に求められる職業だと思いました。

#### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

先ほども述べているように、「与えたい・前のめりの気持ち」だけでは逆に現地の人に苦勞をさせてしまうかもしれません。そこで国際協力の場で必要なことは、ときに毅然とし



た態度をとれる「冷静さ」と、地道な作業や人間関係の形成、会話ができる「気長さ」だと私は考えました。「国際協力がしたい」という気持ちでその場に入っていくことは十分素晴らしいですが、「あの国のこういうところと一緒に改善したい」という気持ちで入っていく方が事前のリサーチがきめ細かくなり、より有意義な支援ができるのかもしれませんが。私自身は今まで新興国や開発途上国に赴いた経験はなく、未知の状態です。ただ、他の先進国と比べても日本のインフラ・物質面の豊かさは秀でていることを実感し、アジア諸国全体の生活水準の底上げに貢献したい気持ちが湧き、強くなってまいりました。今後開発途上国でのボランティアをしていくにあたって、国際協力のプロフェッショナルである中田先生でもその方法に関しては長年手探りの状態だったという話をお伺いし、改めて国際協力の難しさと、あらかじめ正解があるわけではないことを理解しました。誰にでもチャンスはありますが、その方法に関しては真剣に学ばなければ誰にでもできるわけではありません。国際協力をするその姿勢についても学んだ非常に有意義な3時間でした。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

「国際協力」を目的とするよりも、「あの国のこんなところと一緒に改善したい」という気持ちを持って今後新興国や開発途上国のニュースに注目し、行動を起こしたいと思います。その方が計画を立てて行動することを好む私にはぴったりだと考えるからです。同時に、得た情報に対し「5W1H」を問い、受け身の姿勢で情報を得続けないようにしていきたいと思いました。この講義を拝聴するまでは「国際協力」という言葉をととても壮大に感じておりました。しかし、先述にもありますが国際協力のその1つ1つは人間関係の構築と地道な作業の積み重ね。現地の問題点と最適な解決方法を見失わないためにも、「冷静さ・気長さ」を今から心がけていきたいです。経済的には豊かだけれども、資源が少なく食料自給率も低い、そして自然災害が多い日本にとって国際協力はする側としてもされる側としても実は非常に身近な存在だと思いました。国民の皆が意識するように、このような講義が気付きのきっかけとしてより一層行われると良いと感じました。

仲間 明子

奈良女子大学 文学部人文社会学科社会情報学コース3年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

「How と Why は使わないことが対話を成功させるコツ」それがこの講義で一番印象に残ったことです。私はいつも「なぜ？」が気になり、相手に問うことが多いのですが、他者とのコミュニケーションが難しいと感じることも少なくありません。今回中田さんのお話を聞き、私の今までの対人関係の構築の方法を見直す機会になりました。相手に簡単な

質問を投げかけ、心を開かせる、自然と聞き出すことをワークショップを通して実感できました。講義を終えた後、以前アメリカでホームステイをしていた時のことを思い出しました。毎日学校から帰ると、“How was your school today?”と聞かれていました。その時はいつも“Good.”や“Fun.”と答え、話を広げられずにいました。上手に答えられないもどかしさを思い出しました。普段の生活でも、「最近どう？元気？」ではなく、「今日は遊びに行ったの？どこに行ったの？」と簡単に改善できるのではないかと考えました。私はいつも、聞きたいことや答えに急いでしまうことが多いので、普段の自分を見直す機会になりました。

また、中田さんのバングラデシュでの体験談も印象に残りました。成人識字教育のメリットについて村の女性が薬の注意書きや契約書を読めるようになるから嬉しいと答えたが、それは宣伝文句をなぞったものであったという話でした。もちろん、日本や先進国の人から集まる寄付は大きなもので、魅せることが必要なこともあるかと思います。しかしながら、私は人々と直接関わっていきたいので、もっと現場を、現実を知らなければならないと強く思ったお話でした。自分の足で行って体験することの大切さを実感しました。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークは、一緒に参加した同大学の友人と行いました。対話の方法を理解しても普段の話し方と違い、最初は違和感がありました。聞く側は難しかったです。何を聞いたらいいかかわからず、「なぜ？」を問いたくなることもありました。例を見ながら進めました。しかし、質問をされる側は、聞かれることに慣れると「もっと詳しく伝えたい」「実は…」と自然と話したくなりました。これが上手な聞きだし方なのではないかと実感できました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は国際協力や開発の分野に携わりたいと思い、これまで学生団体で活動したり、国内外のツアーに参加したりしてきました。「国際協力の分野では何か技術がなければならない」といつも焦りがありましたが、この「対話のスキル」が何よりも大事なのではないかと思います。また、「与えるのではなく、対等に、一緒に働く」ことが私の目標なので、このスキルを早く身に付けたいと思います。特に井戸のケーススタディは印象に残りました。いままで、企業のCSR等で、「井戸をいくつ作りました！」という宣伝を目にすることがありましたが、本当に役に立つばかりではないということがよくわかりました。その見極めが大切で、本当に必要なことを現地の人との対話から見つけなければならないと思いました。

## 今後の学習や研究に向けた抱負

私はこの夏からインドネシアへ1年間の交換留学に行きます。大学では社会学を専攻しているので、現地では、インドネシアの家族の実態について調査したいと思っています。その計画を前に、対話のコツを学ぶことができてよかったです。この授業で学んだことを練習し、実践につなげ、調査をより良いものにしていきたいと思います。

ムラのミライ中田さん、お茶の水女子大学グローバル協力センターの皆様、ありがとうございました。

浪野 愛子

麗澤大学 外国語学部外国語学科英語コミュニケーション専攻3年

## 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

和田さんのインタビュー術が印象に残りました。例えば、和田さんはプロジェクトの中身とは関係のないやり取りから、本題に展開させ、決定的な質問を投げかける。その際には、why や how のような相手が答えを操作できてしまうものは使用せず、what, when などの事実のみを聞き出すことを心掛けることが大切だと学んだ。

## グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実際にそのインタビュー術を使い、ペアで事実のみを聞き出す質問をし合ったがとても慣れるまでは難しいものだと感じた。しかしそういう聞く方法を学んだことで、今後、意識しながら会話を試みようと思った。

## 国際協力や地域開発活動について考えたこと

我々が発展途上国へ援助してあげる、というスタンスではなく、彼ら自身が主体となって自主的に問題克服に取り組むよう意識を植え付けることが一番重要なことだと感じた。

## 今後の学習や研究に向けた抱負

今夏、ミクロネシアでのプロジェクトで現地調査する際に、アンケートよりもインタビューを用いて活動したいと思った。また、今回の学びを生かして、国際協力に携わってみたいと思った。

平山 真紬里

麗澤大学 外国語学部 4年

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回のファシリテーションを通し、一番驚いたことは自分が何時もやっていたのは必ずしも事実質問ではないと気が付いた点である。コミュニケーションにおいて質問やそれに対する反応は必要だが問題点や解決策発見において、相手の思い込みではなく事実を引き出す事は重要である。そしてそのためのプロセスは簡単なようで練習が必要だと感じた。相手の答えから何が事実か、その要因は何かを会話をしながら見極め論理的な因果関係があるのかを判断しなければならないからである。普段そのようなことは意識しないため最初は難しく感じるかもしれない。

#### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

今回のグループワークでは身近なものから会話を広げるといったものだったのでこれなら続けていけそうだと感じた。しかし私達はこの手法を国や文化の異なるところで実践しなければならない。言語が同じで且つ知り合い同士でさえ事実質問を続けるのは難しい事なので日頃から話し方、論点に注目していきたい。

#### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力においてこちらから一方的な援助をしてしまうと援助を受ける国や地域の自立を妨げることになる。お互いが協力し、問題についての原因や解決策をシェアしなければならないが、そのための対話ですれ違いが無いよう実践していきたいと思う。国際協力というとなにか援助を「してあげる」というような目線に立ってしまいがちであるが、同じ目線で同じ問題を見つめ対話をするに大きな意味があるように感じた。なにか特別な技術や経済的な支援ができる訳ではないがこの対話なら一人の人間としてできる大きな一歩かもしれないと思う。

藤井 理緒

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 1年

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回この、「国際協力のための対話型ファシリテーション」に参加したことは私にとって大きな財産となった。きっかけは学内にはってあるチラシを見て、国際協力に興味があるから、実際にそういった経験をされた方の話を聞けるなら行ってみよう、といった程度の

ものであった。しかし実際に講義を受けてみると、とても衝撃を受けた。それはただの国際協力についての経験談などではなく、国際協力の根本的な原因の究明、そしてその問題を大きく改善するための方法の伝授であったからだ。所詮チラシのうたい文句だと、あまり本気にしていなかったが、まさに「目からウロコ」であった。私は実際に途上国に行き、支援をする活動をしたことはない。ただ、以前から世界の経済格差や貧困問題に興味があり、大学でも「国際協力学」という授業を受講しているため、国際協力の問題点などはよく耳にしていた。良かれと思ってした支援が実際には地元の方々のニーズと結びついておらず結局失敗してしまったり、支援が依存関係を生み出してしまい、貧困格差の是正という根本的な問題の解決につながっていなかったり、といったことだ。こういった話を聞くたびに、私は心のどこかで支援を受ける側の人を責めてしまっていた。「どうして、はっきりと自分たちの要求を口にしないのか」「そもそも本当に自分たちの環境をよくしていこうという気持ちはあるのか」「支援団体にお金だけ要求することに何も感じないのか」など、こちらは支援をしようとして資金も技術も提供しているのだから、原因は受ける側にあると決めつけてしまったり、自国にも問題はたくさんあるのにそもそも他国に援助をする必要はあるのだろうか、などということも考えてしまったりしていた。私は結局、支援する側としての視点からしか判断することができていなかったのだ。しかし、今回の授業を受けて、はっきりとその視点そのものが間違っていたことを教えていただいた。原因すべて、とまでは言わないが、支援がうまくいかなかったことの要因の多くは私たちにあったのだ。中田先生が例としてあげてくださった、ある日本の団体が、アフリカなどの貧困地域の村を支援する場合をもう一度考えてみる。日本人が何かアフリカの貧困にたいする支援をしたいと思い、現地の人に何の援助が必要か直接訪ねに行く。「村で一番こまっていることはなんですか？」授業では、もうこの時点でファシリテーションとしてはアウトだと習った。最初は何がいけないのか皆目検討がつかなかったが、今ならわかる。彼らにとって初対面の日本人相手に、自分たちのことを全てさらけだすはずがない。理由もよくわからないが、支援してくれるならもらっておこう、といった心情になることは十分に考えられる。つまり、支援に必要なコミュニケーションができていないのだ。私たちがいくら本当に役立つ支援をしたいと考えていても、まずは相手との距離を縮めて、実情をしっかりと見極める。この過程抜きには支援をすることはできないのだと話を聞いて痛感した。中田先生はここでとどまらず、さらにより効果的な方法を教えてくださった。実際に先生が授業で話して下さってはじめて気がついたことだが、私たちは会話をするとき憶測や自身の感情といった主観的なことを多く話している。例としては、「今日はどうだった？」「あの授業おもしろい？」など、相手の価値観によって左右される聞き方をしている。日常生活ならたいた問題ではないが、これが実際の国際協力としての支援となると話はちがってくる。支援する側が、いつまでに、いくら、どのくらいの人、どのくらいの期間、と客観的に話し合いをしなくてはならない取引であるにもかかわらず、日常生活と同様の聞き方、「何

にこまっているのですか?」「何が大変ですか?」などといった主観的な意見を求める聞き方をしてしまっているのは、永久に本当に知りたい情報や客観的な事実は手に入らない。言葉で書くと当たり前のように感じてしまうが、授業で先生の口から聞くと、本当に衝撃的で新たな視点がひらけたように感じられた。国際協力がこれからもっとより効果的に改善されるためにはこの考え方、技術をもつ人がひとりでも増える必要があると強く感じたし、自分も実践したいと感じた。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実際に先生に教えていただいた質問を友達にしようとするのだが、これがとても難しかったことだ。頭ではわかっているけど、いざとなると、「好きなの?」「どう思う?」などと主観的な質問をしてしまっている。この技術が何度も実践して経験で慣れる必要があると実感した。さらに、同じ授業を受けても友達と気づく村の問題点に違いがあるのが興味深かった。国際協力では、より多くのひととの話し合いが肝要だということの表れに思えた。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

まだ漠然とはしているものの、この授業を通じて思ったことがいくつかある。一つ目は、支援とは自分たちよりも相手のことを考えておこなわなくてはならないということだ。いくらこちら側に支援の決定権があったとしても、うまくいかない場合は自分たちに原因があると考え、話し合い（もちろん客観的事実の質問で）に重点をおくこと。主題としてあげたように、国際協力は主観的な感情だけでは成果が得にくく、客観的に事実を把握し的確な支援をすることが必要とされる。もちろん、ある人々を支援したいという気持ちは尊重すべき大切なものであるし、活動のはじめのモチベーションであることはいままでのない。しかし、ただ支援をしたいという気持ちでは、相手の本当のニーズに応じて支援を成功させることはできないと、この授業で習った。常に自分たちの態度や取り組み方が支援の成功にぎっている意識して誠実に取り組む必要があると感じる。二つ目は、ただの支援ではなくお互いが発展できる経済的ビジネスパートナーとしての支援をするべきだということである。先生の経験談であったように、ただ支援してあげます、といった態度では相手もなぜ支援してくれるのかがよくわからず、もらえるならもらおう、といったうわべの関係での考えになり、お互いに不幸になってしまう。しかし、対等なビジネスパートナーとして協力しましょう、といえどどちらも win-win 関係を築けるし、より効果的な支援も可能になると感じた。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

ところで、今真の相手とのコミュニケーションは客観的な質問、話をするのが肝要だと言いながら自分の主観的な感想しか書いていなかった。だから、この授業を通じて実際

に改善された私の身近な例をあげたい。中田先生も話していらしたが、私もまず身近な家族と実践してみることにした。普段私は妹の高校の様子を聞くときに、「今日はどうだった?」「テストはどう?」などと質問していた。案の定、答えは「特に何も」「微妙」で会話は終わる。しかし、相手がしっかり答えてくれない、と思うのではなく、こちらの質問を変えてみた。「今日英検だったよね?試験官日本人だった?」「今日のテスト科目何だった?」など。すると、妹が普段よりもたくさん話した。なんでも、「前回同様日本の女性で厳しくて、もう英検の面接はこりごりだ。」「数学と化学が同じ日で困った。」など。もちろん、すべての会話を事実の質問にしてしまうと味気ないものになってしまう、冷たい印象を与えてしまったりするかもしれないが、この経験から適度に事実質問をはさむことは、相手のことをより深く知るためにとっても効果的な方法だと思った。この技術を忘れないためにも、さらに先生の著書を読み、継続していきたい。国際協力に興味のある友人にも話したい。そして、いずれ国際協力に携わる機会があれば、ぜひ実践したい。

**藤原 愛**

**お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 3年**

#### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義を通して学んだことは数多くありましたが、得た最も大きなものは、自分の経験した違和感の正体を知ることができたという点です。数年前、国際協力に関心を持ち、フィリピンでとある NPO 団体のスタディツアーに参加した際、私は非常に強い違和感と失意のようなものを覚えました。現地の子どもたちと友人になったことがきっかけで、その子どもたちの暮らす地域へ入ることのできるスタディツアーに申し込んだのですが、まるで参加者の同情を誘うような文言を誘導するようなスタッフの質問と、現地の人々の模範解答のような答えに、「私たちはその団体のサポーターになることが望まれていて、支援をしようという気持ちになるよう同情を誘われているのだけなのではないか」「団体の活動紹介というより、宣伝されているだけなのではないか」という感覚を覚えたからです。しかし、それは必ずしもスタッフと現地の人々が示し合わせて行っているから起きるのではなく、そういった答えを結果的に導く質問をスタッフがしていたからなのだと講義を聞いて気づくことができました。

#### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

質問、対話の仕方について、目からうろこでした。正直、質問は誰でもできると思っていましたが、スキルがあるか否かで、聞き出せる答えの質も量も変化してくるということがとても深く印象に残りました。ペアワークで感じたことは、そのスキルをもってする対

話の効果と、難しさです。話したうえでは納得していたものの、実際に事実を聞いて質問を行うことは難しく、おそらく習得には時間はかかるだろうと感じました。しかしその一方で、短いペアワークの時間内で、一つのものから得ることのできた相手の情報量は普段と比較することができないほどで、その効力を身をもって実感しました。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

「かわいそうだから、助けてあげる」という意識の下、一方的に与える支援はもはや支援ではなく害であると感じました。最近では、そのことに人々が気がつき、エンパワメントという言葉をよく耳にするようになりましたが、その先の方向性について今回ヒントを得ることができたように思います。エンパワメントと一言言っても本当にエンパワメントとなりうるかは不明確なところがありますが、対話を通して双方が必要なもの、問題点、現状を整理し考えていくことが今後の活動において非常に重要であると感じました。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

この講義で学んだことを、今考える限りで三つのことに役立たせていきたいと考えています。一つ目は、卒業論文。二つ目は、現在関わっている NPO の活動。三つ目は、将来に関することです。学んだ対話方法はもちろん普通の生活の中で利用し、磨いていきたいと考えていますが、特に上記の三点において活用していきたいと考えています。

一つ目の卒業論文では、参与観察で論文を書こうと考えているため、インタビュー時により確かな情報が得られるよう、「What」「When」「Where」「Who」「How」を意識して質問をしていきたいと考えています。具体的には、外国にルーツを持つ人々に焦点をあてて論文を書きたいと考えているため、「日本での生活で困っていることはありませんか」「どういったサービスが必要ですか」といった質問をするのではなく、「いつから日本で暮らしているのですか」「学校で最も成績の良い科目は何ですか」「学校以外のコミュニティに参加していますか」「それは何人の人が一か月にどのくらい参加しているのですか」といった具体的な事実を問う内容の質問を増やしていきたいと考えています。

二つ目の NPO での活動においては、支援している地域の女性と、日本の女性たちへの街角インタビューを土台とした映画を制作して、コンテストに応募しようと活動しているため、そのインタビューの内容を講義を踏まえて再検討したいと考えております。

三つめに、将来というあいまいな表現ですが、いつかは国際協力に何らかの形で携わりたいと考えているため、その時までスキルを磨きたいと考えて実践したいと考えております。

以上三点が私の今後の抱負です。



古市 彩乃

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科社会学コース 3年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

この「対話型ファシリテーション」の技術から得られるものはもちろんのこと、それが国際協力・開発の問題点をあらわにし、解決への糸口を見出す手段になると分かったことが大きな収穫であった。

前半の中田先生のお話の中で、バングラデシュでの国際支援活動における聞き取りでは NGO 側の型にはまった質問しか出来ず、それゆえ活動内容自体も現状に即していないものになり、結局は相手側が合わせているような状況になってしまい、もどかしさを感じていたとおっしゃっていた。私自身、国際支援に関連した話を講義等で聞く機会が多かったが、同様の感情を抱いていた。どの活動も「支援する側がイメージしている支援される側の現状」に即したものであって、本当にそれがその地域に合っているのか、現地の人々が求めているのはその活動なのか、と疑問に思うことが多々あった。しかしながら、それを解決する手段が何なのかも分からないままであった。

今回お話を聞いていく中で、この「対話型ファシリテーション」が上記の疑問を解決する手段であると気づき、大きな衝撃を受けた。中田先生がおっしゃっていた和田信明さんの事例からは、現地の人々のインタビューを通して支援活動の欠陥や改善点をあぶりだす姿を読み取れた。一方で、支援団体に依存しがちな現地住民の問題点も同時に存在するということがあらわにしていた。つまり、支援活動における問題は NGO 等の支援する側だけにあるのではなく、現地の支援される側の人々の意識にもあったのである。この両者を解決するのが和田さんのインタビュー方法であったのだ。それを中田先生が言語化し理論として確立したのが「対話型ファシリテーション」である。そして、この技術は現状の支援活動の問題を洗い出すだけでなく、適切な支援活動を可能にする画期的手段だと感じ、感動を覚えた。

もう一つ印象に残ったのが、中田先生が何度かおっしゃった「モチベーションは単純だ。」という言葉である。国際貢献等々の難しい理由ではなく、「カッコいい」や「やりたい」といった単純な気持ちが、人の行動を突き動かすきっかけになるとおっしゃっていて、その通りだと思った。国際協力や開発の現場に限らず、こういった単純なモチベーションが大きな成果を生み出す要因になりうることは多い。凝り固まった思考をいったん外して、自由な気持ちで考えてみることも大切だと改めて感じた。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

ペアによる対話型ファシリテーション技術を踏まえた事実質問の実践練習においては、難しさの反面で、得られる情報や引き出せるパーソナルヒストリーの多さに驚いた。質問

する側の時、私は相手の持っていた本について質問していったが、話が広がっていくうちに、頭ではしてはいけないと分かっている、「どうしてその本なのか」や「いつも本を借りているのか」などの思い込みを誘発する質問をしてしまった。一方で、聞かれる側の方は、一つ一つのものに対してははじめから頭で考えていた自分が話したいことを優先的に話してしまい、話の方向性を定めようとしてしまった。しかしながら、質問する側の時、意識的に事実質問を繰り返すうちに、相手の経歴など意図していなかった情報を得ることが出来、さらにその物にあった1つのエピソードを超えて様々なパーソナルヒストリーを聴くことが出来た。聞かれる側の時も、思いがけない質問をされることで自分では意識していなかった情報やエピソードを語ることとなり、驚いた。事実質問を意識することが、いかに有用な対話型ファシリテーションの手段となるか、痛感した。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

先述したように、今までは国際協力・開発活動に関して、本当にこれが正しいのかと疑問に思うことがあった。今回の講演でその問いの解決の糸口が見えた。講演後の質疑応答の中にも、国際協力には意味があるのかという疑問を持っており、この講演によりその問いに答えが見出されたという方がいた。「対話型ファシリテーション」の技術が、国際協力・開発活動の場に革新的な変化をもたらすことは間違いないであろう。現在の、支援アクターと需要者の関係が、与える側と与えられる側である前提に立っている問題を意識化し、この技術を応用することで現地の人々が求めていることを見極め、お互いの気づきの下で支援活動を行っていくことが重要であると考えた。

今後、国際協力・開発活動がさらに広まっていく中で、上述の支援のあり方についての問題がさらに顕著化していくだろう。支援の広まりと同時に、この技術の広がりにも期待したい。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

この技術は、国際協力の現場だけでなく、様々な対話の場面で応用できる。フィールドワークや参与観察の場面ではもちろんのこと、グループディスカッション等のビジネスの場面にも使えるであろう。個人的に、9月のスタディツアーにおいて、この「対話型ファシリテーション」の技術を使うことが出来ればと考えている。そのためにも、事実質問を円滑に行えるよう、些細な会話の場面で練習できればと思った。

本田 あや

津田塾大学 学芸学部国際関係学科多文化国際協力コース 2年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私が普段生活する環境では、意識することなく相手の感情を聞くことが多い。同様に相手に感情を聞かれることが多い。また、「どうだった？」とだけ聞かれ、何を話せばよいかかわからないことが多い。このように、感情に左右された質問はその一時期の考えであるため、正確性を持たず、また、一般化された質問は相手の思い込みや意見、考えを誘発し、相手には悪気はなくても無意識のうちに相手が意見を操作できてしまう。したがって本当の情報を得ることが難しいということが分かった。では、どのような対話をして相手から情報を得ればいいのか、真の情報を聞き出すためにも、相手に「事実」を聞いていくことが大切であり、事実を聞くためにも英語でいう、5W1Hを使って聞くことが大切だということが分かった。しかしここで気を付けなければならないのは、How 単独での質問は避けることと、Why という質問はしてはいけないということだ。How に関しては前述したように、相手も何を答えればよいかかわからず、具体的な答えを得ることが出来ない。また、Why に関しては、こう聞くことによって相手の言い訳を誘発してしまう。この質問が、よくある「お金が足りない、技術が足りない」などという答えを導き出してしまうのだ。したがって、実質 4W (1H) で相手と対話していけばいいということがとても印象的だった。また、「～が足りない。」という答えが返って来たときには、「どれくらい足りないの？」と返すといいということも分かった。信頼関係が築けていない状況では相手は一番に問題になっていることを話してはくれない。その状況下では、いきなり「問題はなに？」と聞くのではなく、たわいもない話、しかし事実である話から聞いていけば徐々に相手の本当の思いを聞くことが出来るということが分かった。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

講義の中に、周りの人たちと実際に講義で習った対話方法を実践してみるというのがあったが、事実を聞いていくという対話の技術がいかに難しいかということが分かった。お互いにやり取りをしている中で、「～と思う。」という回答が出てきていたが、これは答える側があまり覚えていなかったというのもあると思われるが、質問をする側も事実を聞く質問が出来ていなかったのも原因にあると思われる。また、どんどんと話を進めていきたいという気持ちはあるのだが、次は何をどう質問していいかわからずに、話の途中で何度か考えてしまったため、会話がとぎれとぎれになってしまった。また、今回私が一緒に事実を聞く対話の練習をさせていただいたのは、初対面の方だったため、どこまで聞いていいのかという判断がとても難しかった。しかし途上国へいけば初対面の人に対していろいろと聞いていく機会は多くあるはずだ。そのためにも今回講義を聴いた後にすぐに対話

を实践できたのは、今後実践し、いずれは使いこなせるようになるためにもとても良い経験だと感じた。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

私がマラウイに行ったとき、そこで出会った何人かの援助団体に属する人々は、マラウイの人々の中には、あれをやって、とこちら側がいうと、相手は大体わかったと言うそうだ。しかし、わかったと言ったのに真面目に取り組まないことが多く、どうしてだと聞くと、お金がないからだ、技術がないからだ、と口々に言うそうだ。講義を受けて私は、まさにこれだ、と思った。もしかしたらマラウイの人に対して、言い訳を誘発する質問をしていたのかもしれない、一般化された質問をしていたのかもしれない、もしくは無意識のうちに自分たちの意見を押し付けていたのかもしれないと思った。また、援助に関わる人々の中には、マラウイの人々は援助慣れしている、と話す人々が多くいた。また私自身そう感じるが多々あった。しかしもしかしたらこれも相手が本当に思っていることを聞くことが出来なかったから、もしくは相手が自分たちの本当の問題をわかっていなかったとして、その問題を導き出せる対話をしていなかったからかもしれないと思った。そのため、現地の人々には自分たちには何がどのくらい足りていないかがわからずに、我々の機嫌をとれるような回答しかしてこなかったため、人々の自立心がはぐくまれなかったのかもしれない。だからこそ、いかに対話の技術を用いて、相手の本当の思いを聞くことが大切かということを感じることが出来た。事実を聞く対話の技術を用いることで、今後の援助はよりよいものになるかもしれない、支援後もプロジェクトで現地の人々が得たものが継続していくかもしれないと考えた。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

私は大学3年生の時を中心に、フィールドワークに行く予定である。これまで私は、フィールドワークのために予めある程度の質問をつくっておかないといけないと思っていた。しかし今回の講義をきいて、事実を聞くことと、最も聞きたい重要な部分からそれなければ、柔軟にやってもいいのではないかと考えた。しかし、実際に現地である程度の対話術が使えないといけない。そのためにも、今のうちから意識して、事実を聞くというのを日常生活でも実践していきたい。また、講義をきいていて思ったことだが、お金の援助にも限りがある。では、今そこにあるもので、人々の技術、知恵を使って何か出来ないかという、その「何か」を今後考えていきたい。

三浦 詩歩

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 1年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義を通して、今まで私が思っていたような住民たちとの交流や対話というものが、いかに間違っていたのか、開発において役に立たないものであるかがよく分かった。私たちは開発や協力の場面に関わらず、すぐに本題や大きいことを聞こうとしたり、抽象的な質問ばかりをしてしまいがちであるし、そのほうが答えやすい、都合の悪いような質問の時は無意識のうちに答えを変化させたりできる、という意識が働く。しかしながら、それは、開発、協力の場面では全く無意味であるし、双方にメリットは生まれてこない。大切なのは、小さなことからコツコツと事実質問を繰り返すことで本音を聞き出し、さらに自分も相手も同じ問題意識を共有するということだとわかった。これは今まで私の中にはなかった新しい視点であったし、これが現場で本当に求められているものなのだと分かった。

### グループワークや討論を通じて学んだこと・印象に残ったこと

グループワークを通して、いかに事実質問をすることも答えることも慣れていないかわかった。質問を考えるだけでも一苦勞だったし、答える側も適当なことは言えないので一瞬考える時間が必要だった。しかし、事実質問によって、本当に聞いてみたいことが聞けた、伝えたいことを伝えられた、という実感があった。この感情は開発の場面では大切だと思う。自らも相手のニーズを的確に聞き出してより具体的かつ実践的な活動ができるし、相手側も本来自分たちが望んでいたことを伝え、さらに双方での理解も確かめられる。しかし、この話術を身に付けるには、たくさんの練習と実践が必要だと感じたので、友達や家族との日常会話から練習を積み重ねていかないといけないと感じた。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は現地の言葉のある程度話せるようになれば、人とのコミュニケーションは難なくでき、自分が聞きたいことも聞けるようになるだろうから、言語ができれば大方十分だろうと勝手に思っていた。しかし、今回の話で、言語ができるようになったほうがよっぽどもやもやしていた、というお話を聞いてそれは間違っていたのだと気付いた。私は国際協力や地域開発のやり方に大きな誤解をしていたのだと思った。いくら言葉ができていても、対話から本当の問題が見えないと意味がないし、問題の根底がわからないと協力、開発はできないのだと分かった。当然のことだが、開発も協力も簡単な仕事ではないし、一歩間違えればその人たちの生活までがらりと変えてしまう。良くも悪くもできてしまうような活動でもある。そういった分野で活動していきたいというのなら、国際協力、地域開発活動にもっと真剣に関わっていくべきだと思ったし、自分が今、ここでできること、身に付

けられるものは何でもやろうと思えた。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今回のファシリテーション講座では、現地でより実践的に対話を通してニーズを聞き出す方法を学ぶことができた。しかしながら今すぐに途上国に行ってニーズを聞き出し、それを実践して開発活動に生かすことはなかなか厳しい。ただ、事実質問の練習はいつでもできることであるし、その結果友達とさらに深い話ができるというのであれば、これから練習し、真っ先に習得したいものである。今後の学習においても、現地のニーズが聞き出せているのか確認することができるし、そうでなければどういった質問や対話が必要であったのか考えることができるだろう。今後は今まで以上に「なぜ成功したのか」「なぜ失敗したのか」を見極め、さらにどう改善できるか、より良くするにはどうすればよいかを学習の上でも考えていきたいと思う。そのようなことに気づかせてくれた今回のファシリテーション講座は私にとってかなり有意義なものであったし、次につなげやすい内容でもあったので非常によかった。

御厨 佳帆

創価大学 法学部法律学科 3年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回、本講義に出席し大変印象的だったのが、講演者の方が長年の自身の国際協力での苦悩によって編み出した対話術を惜しげもなく、私たちにお話しして下さったことです。そしてこのような講演者の方のお話から学んだのは、自分の先入観に気が付き、それを打ち破っていくことの大切さです。支援にあたり、きちんと現地のニーズを把握することは極めて重要であると思います。私たちは、現地の方が困っているといっていることを聞いてその為の方法を考えますが、その問題の解決の道が様々ある中で、どれを選択するか基準があまりにも支援者側の思考によるものが大きいと思います。これでは、実際に1番問題となっていることに本当に必要な支援が行き届かないと思いますし、現地の住民も本当の問題には気が付かないのです。そのため、水不足なら井戸、女性の地位向上のためには教育など、なにか問題を聞けばすぐさまに解決方法を決め、それが正しいかを確認するのではなく、地道な対話の積み重ねの中から、紡ぎだそうとの姿勢が大切であると改めて気が付くことができました。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

やはり、人には先入観がいつの間にかあり、それゆえに自分が予想した答えと異なる

回答であった時に、そこからどのように質問していくべきかを考えることは非常に難しいです。知らず知らずに頭の中で思い描いていた問題であろうことに誘導するかのような質問をしてしまうのです。一般的な質問ではなく、5W1Hを使った質問をしていくのはもちろんですが、それ以前の心構えとして、相手から返ってきた質問を基に次の質問を練っていくことは思っていたより大変でした。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと、今後の抱負

国際協力の分野とは何もしごとく特殊で優秀な人たちが行うことではなく、日々の人との関わり合いの中で様々なことを考えている人こそが活躍できる場であると思いました。講演者の方も最後に言われていましたが、この対話術を知ったからといってすぐに身につくものではないと思います。だからこそ普段から粘り強く使い続け、必ずや自分の武器にしていきたいと考えています。

吉村 玖瑠美

お茶の水女子大学 生活科学部人間環境科学科 4年

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

現地の方とコミュニケーションが上手くとれず、真のニーズにこたえられないことが原因となり、援助される側が援助をする側に依存してしまっていていつまでも自立できないということは、国際協力における大きな課題である。このような問題が起こる原因は様々であるが、言語や文化の違いから生じるコミュニケーション不足が大きな原因だろう。私自身、これを解決するためにどのような行動をとればよいのだろうかという疑問を抱きながら講義を受けるまで考えていたが、行き着いた結論は「生まれた環境も、使用している言語も違うのだから、コミュニケーションを円滑に進めるなどということは不可能に近いのではないか」というものだった。しかし、中田さんの講義を受け、真に意味のある援助にするためには、コミュニケーションにもコツがあるということを知った。また、そのコツを習得するためには、試行錯誤を繰り返し、粘り強くコミュニケーションをとり続けることが大切なのだということを知った。これは、国際協力の現場だけではなく、接客業など人と関わる仕事をする上でも重要だと感じられた。個別指導塾で講師を行っているが、中田さんから教わったことは、生徒とのコミュニケーションを円滑にするのにも生かせると感じた。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

“Why” “How” という言葉を使わずに、相手に質問をしていくことは簡単そうに思えた。中田さんが、初対面の学生が飲んでくれた「缶コーヒー」についての質問をスムーズに

行い、その学生のそれまでの生き方までを聞き出していたからだ。しかし、私が実際にやってみると会話が続かなくなり、難しく感じられた。日常会話において“Why”と“How”をいかに自分が多く使っているかを自覚することができた。特に日本人は、事実を聞き出す質問(“When”, “Who”, “What”, “Where”)をするというよりも、遠まわしで曖昧な質問(“Why”や“How”)をする傾向にあると思われる。国際協力の現場においては、日本人のこのような傾向を踏まえた上で、事実質問をするように心がけていくことが大切である。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

援助をする側は、やはり何かしらの成果を得たいと思うものだ。しかし、意味のある援助にするためには、援助をする側に「忍耐」が求められる。その忍耐とは「とにかく現地の人とコミュニケーションをとり続けること」だ。中田さんから教わった対話術を上手に使えるようになるためには、コミュニケーションをとる機会にできるだけ多く出会い、何度も実践を重ねることが必要だ。実践を通して、心が折れそうになるような場面にも多く出会うだろう。それを乗り越えてこそ、中田さんのように上手にコミュニケーションがとれるようになるのだと思う。国際協力に携わる際には、粘り強く謙虚な姿勢をもつことが大切だ。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

私は、今年の9月に大学の授業でカンボジアへ行く予定だ。大学3年生の頃から国際協力に関心を抱いており、NGO 団体などを実際に見学することができるため、非常に楽しみだ。しかし、初めて発展途上国を訪れるということで、不安も大きかった。その不安とは、「現地の人とコミュニケーションを上手くとれるのかどうか」というものであった。中田さんの講義を受けて、その不安は少しなくなったように思える。出発するまで2ヶ月弱あるが、人とコミュニケーションをとる際は相手の表情等にも注意を払うなど、中田さんから習ったことをまずは日本で実践したいと考えている。

李 慧

お茶の水女子大学大学院 ジェンダー社会科学専攻 M2

### 講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私は、開発途上国の人と交流したことはない。人を助ける側と助けられる側の間に、実は大きなギャップがあることを初めて知った。それによって、真実、あるいは事実を知ることが難しくなる。しかし、それは完全に開発途上国の人々がわざと嘘をついて真実を隠そ



うとしているわけではない。責任は援助する人にもある。最大の原因は、コミュニケーションを取る時に使われる方法にある。

普段対話の技術を訓練せず、いきなり自分の勘に従って質問すると、一般化された質問をすることになりやすい。曖昧な質問に曖昧な答えが出てくるので、次の支援に不利な影響を与える可能性が高い。従って、そういう思い込みの質問はしないように努める意識が大切だと思われる。一つの例を挙げると、「なぜ」を聞かないことだ。人々は、自分の都合のいいように物事を解釈する強い傾向がある。それは「精神の自己防衛システム」と呼ばれる。「なぜ」を聞くと、相手は自分勝手な安易な原因分析を話すことになるので、事実を知ることはできない。

それで、事実を知るための手法がある。いわゆる事実質問である。事実質問の基本的な方法としては、大きく二つの種類がある。

1. 「いつ」「どこ」「何」「誰」などのように、単純な疑問詞を使って質問する。
2. 「～したことがある?」「～を知っているか」「～がありますか」など過去の経験や行為、知識を尋ねる質問がある。

こういう「対話型ファシリテーション」の手法は事実質問に始まり、事実質問に終わる。この手法を学んだ後、上手に使えるために練習が必要だ。それ以外に、注意すべきポイントがいくつかある。まず問題を発見する前に、回答者との間に対等、かつ良い関係性を構築するための工夫が必要なので、対話は一番簡単な質問からするとよい。次は問題を分析する時に、よく「～が不足している」という答えが出てくる。それに対して、「不足していることをどのようにして知りました?そしてどれくらい必要でしょうか」という問いかけが重要だ。最後解決策に辿り着く前に、できるだけ回答者を誘導しないように注意することだ。援助される側の自立性を守るために、答えはなるべく回答者から出す。

以上は今回の講義を通じて学んだことである。

### グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークは二人で一組、自分の身の回り品を相手に見せて、質問される。5分後相手の物について質問をする形でやった。最初相手は自分の鍵を見ながら、勉強したばかりの質問方法で私のことを聞いていた。聞かれると、不思議だと思う。ごく簡単な質問で、私の記憶を呼び起した。質問に答える以外に、話せることがある。このようなやりとりで、お互いに情報を得て、親睦を深めることができた。

私が質問の番になる時、まだ慣れていないので、一瞬頭が真っ白になった。やはり方法を知っても、練習しないと身に付かない。

### 国際協力や地域開発活動について考えたこと

自分はこの領域に関する専門ではない。普段はこういった概念に触れる機会も多くない。

つい最近から、国際協力や地域開発活動などの言葉に対してだんだん馴染んできた。

そして、学校で国際 NGO が展開しているグローバルキャンペーンに関する映画上映会があって、スタッフとして参加した。このきっかけで、開発途上国の女の子のことを系統的に知った。

女の子だから、学校に行かせてもらえなく、10代で結婚させられる。さらに、HIV 感染や出産による死亡の人も大勢いる。従って、開発途上国の女の子たちが「生きていく力」を身に付けることができるように国際協力の力が必要だ。

この映画を見て、直観的に国際協力の必要性を感じた。私の考え方も変わった。以前、旅行が大好きで、ずっと世界の美しい景色を見たい。しかし、こういう夢は誰でも簡単に持つことができる。世界の美景より美しいのは、人々の笑顔だと思い始めた。

専門的な知識はまだ足りなくて、感情的に色々なことを考えた。将来、実際の行動で小さな力を捧げたい。

### 3. 講師報告書



## 研修報告書

1. 研修対象： お茶の水女子大学グローバル協力センター大学間連携イベント
  2. 研修科目： 「国際協力のためのファシリテーション」
  3. 研修期間： 2015年7月4日（土）13：00～16：00
  4. 研修講師： 中田豊一
  5. 研修開催場所： お茶の水女子大学 大学本館 127 室
- 

## 研修概要（実施方法等）

本研修は、講義と演習を組み合わせて実施した。

講義では、講師の国際協力の現場での体験の共有から始めて、徐々に手法の意義と技法への理解を深めるよう導いた。技法の基礎につき事例を交えて対話形式も取り入れながら解説した後、二人一組になって実際に使ってみる練習をした。その際、講師自身が短いデモンストレーションを行うことで見本を示した。

もうひとつの演習としては、用意したケースヒストリーを読んでもらい、その分析を数人のグループで行い、数人に発表してもらった。

テキストは準備したが、その内容の主要部分は講義でカバーしているため、研修後に復習する際に使ってもらうことを主目的に配布した。

## 所感

大学1年生から修士課程の学生までと、受講者の年齢と経験に幅があったため、できるだけわかりやすく伝えるように努めた。そのこともあってか、ほとんどの学生が高い集中力と関心を示しながら参加してくれたことが、姿勢や態度から十分に見て取れた。講師として強い手ごたえを感じられる充実した研修となったと思われる。参加者の熱意と主催者の優れたアレンジのおかげで、満足のいく研修ができたことを感謝している。

本研修で紹介した対話型ファシリテーション手法は、理論と考え方の部分と技能の部分の2つで構成されており、今回は時間の制約などから前者を中心に据えたが、技能の部分も基礎的なものを確実に伝えるべく工夫した。その甲斐あってか、所期の目的は果たすことができたと思われる。併せて、そうした構造自体を参加者にしっかり伝えることで、本研修の意味と位置づけを十分に理解してもらうことができ、それが今後は技術として習得していくことへの動機付けともなった。

国際協力をテーマとした研修であったが、紹介した手法は、国内でも日常生活でも活用可能なものであり、そうしたコメントが参加者自身から複数出てきたことも特筆に価する。

反省としては、時間的制約を意識しすぎたこともあって、やや早口でまくしたてる部分があったことと、演習の結果についてのコメントを十分に聞くことができなかったことが挙げられよう。



## 4. 資料





## (1) 参加者アンケート集計結果

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

「本イベントを知った経緯」としては、指導教員や知人・友人からの紹介、ポスターやチラシの掲示物、大学のホームページやメーリングリスト等、と多様な方法で周知されたことがわかる。

「内容全般について」は 25 人中 24 人が満足、1 人がやや満足と感じており、非常に満足度の高いイベントであったと言える。

「開催時期と期間」については、16 人が満足、6 人がやや満足であったが、テスト期間と重複してしまったこと、時間が短かったこと等へのコメントがあった。

「テーマの選択」については 25 人全員が満足、「説明の分かりやすさ」については 24 人が満足、1 人がやや満足で、今回のテーマへの関心度の高さと満足度の高さが伺える。

記述部分としては、「途上国へ社会調査に行く前に、ファシリテーション講座を受講して良かった。これで満足せずぜひ技術を習得できるよう実践したい。」「今まで聞いたことのない類の講演で、新鮮かつ面白かった。生きていく上で必要な技術を一つ学んだ。有意義な講演会だった。」など、国際協力の現場に限らず日常的なコミュニケーションにおいても活用できる実践的な内容であり、多くの参加者が今後の活動に役立つと考えている。

本イベントを何で知りましたか（複数回答可）	計
ポスター／チラシ等の掲示	9
大学ホームページ、Facebook、Twitter、OchaMail	8
「共に生きる」スタディグループメーリングリスト	3
指導教員の紹介	10
その他（友人から／昨年の大学間連携イベントに参加して）	3

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／適当	16
やや満足／適当	6
やや不満足／不適當	3
不満足／不適當	0

本イベントの感想（会場）	計
満足／適当	20

やや満足／適当	5
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／適当	25
やや満足／適当	0
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

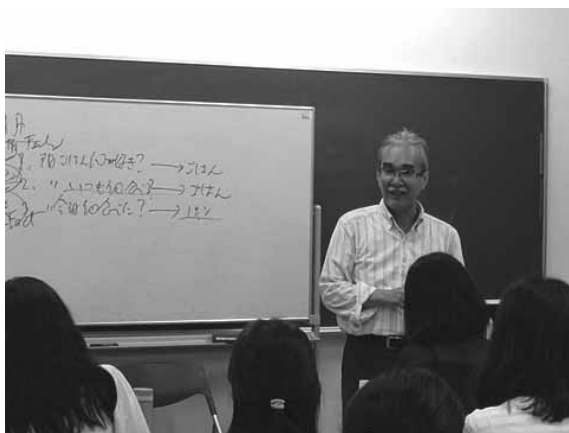
本イベントの感想（説明の分かりやすさ）	計
満足／適当	24
やや満足／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	24
やや満足／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

その他（感想・提案）
<p>私も国際協力は本当にできるのか、先進国のエゴで押し付けてしまっているのではないかという思いが心の底にありました。しかし、それは援助側の聞き方が下手で、本当に住民が必要としていることをうまく引き出せていないことが原因であることに気づき、本当に目からうろこでした。実践してみると、つい感情に関する質問をしてしまい、なかなか難しかったです。日常生活でも十分生かせる技だと思うので、今日学んだことを意識して実践したいと思います。</p>
<p>講義の最初から最後まで、とても新鮮で本当に面白かったです。思い込み、固定概念という無意識に自分が抱く危険性を再認識することが出来たとともに、こうしたお話を単なる理論としておくのではなく、普段の生活から少しでも実践に移すことが出来ればと思っています。これまで自分が抱い</p>

<p>ていた「国際協力」「援助」の形が本当に必要とされているものなのか、正しい形として機能しているのかということについて考え直す機会になったと思います。援助のみならず様々なことに自分なりに昇華して生かせればと思います。</p>
<p>今日はとても学びやすく、たくさんの収穫がありました。「住民主体」などとたくさんの方で言われていますが、それらを反映せず、支援国が色々決めていたという現実など知ることができて良かったです。そこから、私たちの課題を見つけ出した中田さんのお話は本当に貴重なものでした。国際、日本では様々な問題がたくさんこれから発生していくと思うので、今日学んだことを活かし、ファシリテーションの技術を身につけ、使っていきたいと思います。</p>
<p>援助する側に問題があるという謙虚な姿勢をもって、国際協力に携わる必要があると感じた。</p>
<p>すごく勉強になりました。特に練習するときも楽しかった。今後の人生にも役立つ講座です。</p>
<p>このように他大学の人とともにお話を聴く大学でのプログラムは初めてでしたので、刺激の多い時間となりました。</p>
<p>相手に問題を気づいてもらいたい、自分たちで解決策を引き出す話し方、聞き方をよく知ることが出来、今後ミクロネシアで活動する上でかなり役立つ知識を得ました。練習して、研修だけでなく、人とのコミュニケーションももっと向上させることができる話が聞けて良かったです。普段いかに、<b>how, why</b> を使って会話しているか実感しました。</p>
<p>現地報告だけではなく、実際にそこから身につけた能力をお伺いできたことがとても良かったです。技術を聞けた、本当に大事な機会でした。</p>
<p>対象者への質問の仕方、本当に参考になりました。幼稚園児に聞くようなシンプルで分かり易いものが良いのだと思いました。援助者と支援を受ける人、どうしても上下関係になってしまい、両者とも無意識に双方が喜ぶ答えを出してしまいがちなので、事実を聞く質問は効果的だと思いました。ロールプレイはとても参考になりました。</p>

(2) 写真



講師の中田豊一氏



講義の様子



対話（事実質問）の練習風景

### (3) 参考資料

#### ファシリテーションを考えるためのケースストーリー

のどかな田園風景が広がる東南アジア〇〇国の山あいの村。国際協力ボランティア団体に所属する私たちは、日本への留学生を通じて知り合ったこの貧しい村のために何ができるかを話し合うために、主だった村人に集まってもらった。まず私が村人に尋ねる。

私「この村の一番大きな問題は何ですか？」

リーダー的存在の中年男性が答える。

村人「子どもの病気が多いことです」さらにやり取りが続く。

私「たとえばどんな病気ですか？」

村人「一番多いのは下痢です」

私「子どもたちが下痢になるのはなぜですか？」

村人「清潔な飲み水がないからだと思います」

私「水はどこから汲んでいるのですか？」

村人「近くの池からです。森の泉まで行けばきれいな水があるのですが、歩いて1時間近くかかるので、重い水を運ぶのはたいへんです」

私「井戸はないのですか？」

村人「ありません」

私「あれば便利だと思いませんか？」

村人「思いますが、自分たちでは掘れません」

私「どうしてですか？」

村人「技術も、資金もありません」

私「私たちが援助しますので、掘りませんか？」

村人「ええ、そうできればありがたいです」

私「私たちが支援するのは、資金と技術だけです。労働力を村から出してもらえますか？」

村人「もちろんです」

私「掘った後、維持管理も自分たちでやれますね？それが約束できれば、援助します」

村人「約束します」

私「これで決まりですね。皆さんの井戸を皆さんで掘りましょう。子どもたちも健康になるでしょう」

村人「ありがとうございます。母親たちも喜ぶことでしょう」

私たちは、井戸掘りに必要な予算を調べ、村人や地域の行政と相談してこの地域に最適な井戸の掘り方を選ぶなどして、設計図を作り上げた。こちらが提供する部分と、労働力をはじめとする村人が供出できる部分との分担も決まり、井戸掘りが始まった。作業は当初の計画より少し遅れたが、これは途上国では当たり前のことであって、慌てたり焦ったりはしない。

こうして井戸は完成し、村人は清潔な水を手に入れることができるようになった。手押しポンプ井戸からほとぼしる水を掛け合ってはしゃいでいる子どもたちの姿や、水をうれしそうにバケツに移している女性たちの顔を忘れることはないだろうと私は思った。

半年後、様子を見に行ったところ、周囲は少し汚れているものの、井戸は使われていた。

それから1年ほど経ったある日、たまたまその村を通りかかった日本人ボランティアから耳を疑うような話を聞かされた。手押しポンプの取っ手がはずれ、今はどう見ても使われていないようだとのこと。私はその友人が村を間違えたのではないかと思って確かめてもみたが間違いないようだ。

私たちは、数日後、村を訪ねた。やはり友人の話は本当だった。取っ手の取れたポンプはくちかけていて、コンクリートで囲った水場には、土やごみが溜まり放題だった。私たちが来たことを聞きつけた村の人たちが集まってきた。いっしょに計画した村人の一人が、私たちに言った。「手押しポンプの修理代を援助して欲しいのだが」。

私は何と答えていいのかわからなかった。内心では、「自分たちでメンテしようともせず、また私たちに修理代をせがむとは、なんて主体性に欠けているのだ。こんなことでは自立はおぼつかない……」という思いがこみ上げてきたが、口には出せなかった。

湿気をたっぷり含んだ熱帯の微風に、私の体は汗まみれになっていたが、心の中には寒風が吹きぬけていた。

出典：和田信明、中田豊一（2010年）「途上国の人々との話し方—国際協力メタファシリテーションの手法」みずのわ出版

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「国際協力のための対話型ファシリテーション」実施報告書

2015年9月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel/Fax: 03-5978-5546

E-Mail: [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

## 大学間連携イベント「国際協力のための対話型ファシリテーション」実施報告書



お茶の水女子大学